

読心むし人

園芸家が継いだ文化

題名のイングラムは英国の園芸家の名前である。彼は桜の研究者で「チェリー・イングラム」と呼ばれていた。日本の桜研究に大きな実績を残した英国の桜守イングラムの生涯を追った本だ。

彼は裕福な家に生まれた鳥類の研究者だった。二十一歳で初来日、日本の美しさに魅せられ、新婚旅行で再来日している。桜研究のきっかけはドーバー海峡に近いベネンドンに転居、庭園を造ろうとしたこと。その屋敷にあった日本の桜の美しさにひかれ、野生種や園芸種を集めて桜園を造り、一つ一つを観察研究した。

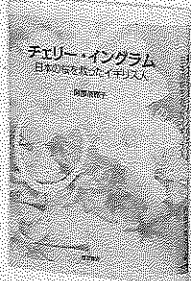
桜研究のために、大正十五(一九二六)年に三度目の来日。そのとき急速な近代化の中で伝統の桜文化が失われていくのを知り、その救出の一端を自分が担

チェリー・イングラム

日本の桜を救ったイギリス人

阿部 菜穂子 著 (岩波書店・2484円)

あべ・なおこ ジャーナリスト。著書『異文化で子どもが育つとき』など。



おつと決心する。その頃既に消滅した園芸種もあった。その一つが「太白」という大輪の白い花を付ける桜だった。たまに日本に里帰りさせることに成功した。

関係者へのインタビュー、残された日記や手紙の丹念な調査のなかで、桜研究に献じた園芸家の姿を描き出すと共に、日本の近代化がもたらしたものの、ゆがめられた日本人の桜観、英国捕虜問題の和解に貢献した桜守たちなど、さまざまな問題が浮き彫りになっていく。英国在住の著者ならではの視点から描いた力作。

(評者 塩野米松 作家)

三代一佐野藤右衛門口伝(平凡社新書)。名桜の保存に努める桜守が、二代の「桜道楽」を語る。

事実が心に訴える

知人に紹介され、数句を読んでもすぐ購入した。自由律俳句という一行の短い詩。「なにもかもなくした手に四まいの爆死証明」「かせ、子らに火をつけてたばこ一本」

著者は長崎への原爆で妻と

記者の1冊

三人の子を失った。残る長女もひどいやけどを負う。爆死した子を発見した翌朝を詠んだ句から晩年までの句が年代順に並ぶ。日記も壮絶だ。目の前で亡くなっていく妻

『原爆句抄』 松尾あつゆき著

20年反芻した声編む

今から二十年前、著者は残留元日本兵や戦前戦中の日本人移民を訪ねてインドネシア、サイパン、ポナペ、台湾、韓国、中国、ロシア、キューバなどを旅した。海の向こうで戦争を体験し、戦後を生き抜いた世代の肉声を聞く最後のチャンスに、「間に合っよかった」と言っ

そんな十人の貴重な声を編んだ一冊だ。けれども戦争体験者の証言集としてそのまま出さず、声を二十年間反芻し、「自分の身体に通す」作業を続けた。昔話ではなく、今を生きる私たちに近づけるためだ。書名の「ひとりの記憶」に、聞き手の強い思いが表れる。国家が起こした戦争は個人を翻弄し、家族を海で隔てた。「しょうがない」と語り手たちは折々に言う。それでも彼らは希望と意志で

ひとりの記憶

海の向こうの戦争と、生き抜いた人たち

橋口 譲二 著 (文芸春秋・1836円)

はしぐち・じょうじ 1949年生まれ。写真家。著書『ベルリン物語』など。



ものごとく」「どつても下ぎ子にあわゆく」。ささやかな瞬で奪われた無念の河小説のように胸に

昨年、四十年ぶり田岡さんの手で復刊

荻原井泉水の当時の著者の句を原爆の火

昭和初期のテロ事件のドキュメント。

絶望 福島 吉原直

復興(明石書店) 震災の手帳大植町に駐在し、復興のつづけてきた新聞記者のりポ